

Title	ペリー日本紀行の最初の日本譯
Sub Title	A note on the first Japanese translation of Hawks' "Narratives of the expedition of an American squadron to the China Sea and Japan"
Author	幸田, 成友(Koda, Shigetomo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1954
Jtitle	史学 Vol.27, No.4 (1954. 11) ,p.1(499)- 29(527)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19541100-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19541100-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ペリー日本紀行の最初の日本譯

幸 田 成 友

一昨年九月下旬、病後の疲勞と倦怠とに苦しみ茫然として一日一日を過してゐると、友人三井文庫員中井信彦氏の厚意により、彼理日本紀行拾冊と題した美寫本一帙を貸與せられた。驚いて卷頭の序文を見ると、皇文久二年壬戌夏四月馨溪大槻清崇とある。日本に現存する彼理の日本紀行譯文中、之が最古のものではないかといふ感が吾が胸をうつた。退屈どころか疲勞を忘れて、それからそれへと研究搜索を續け、遂にこの一篇を草するに至つた。

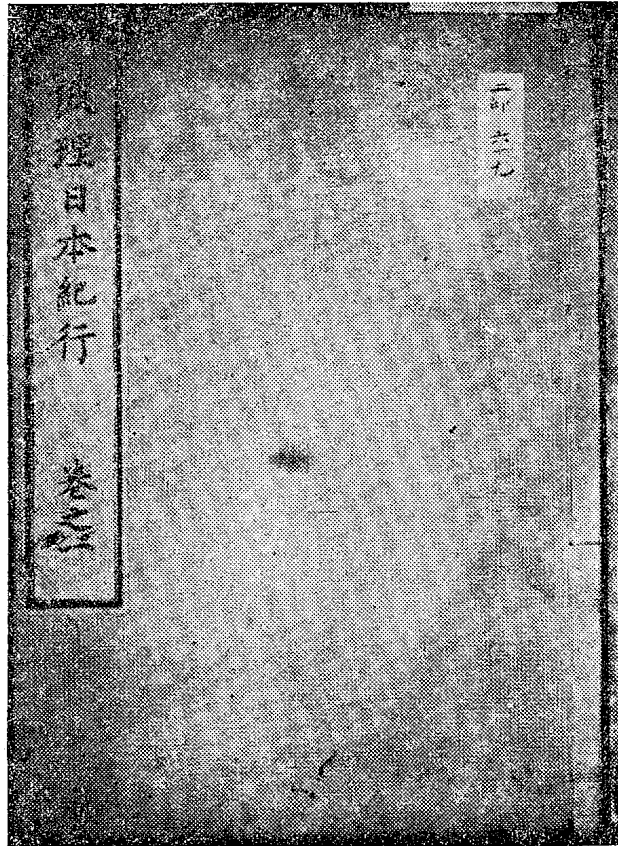
三井文庫と自分との關係は久しい以前に遡る。自分は駿河町の三井組の天井下（大正震災前の）で三井の御觸帳を寫した覺があります。御觸留二冊、御觸帳二〇冊で、三井家記録文書目録の二八九番から三一三番までの分です。大阪市史の第四卷が上下二冊になつたのは、三井家本を載録したことによる點が多い。

本書は美濃判十冊の寫本で、之に縦六寸四分横九寸二分、上下單邊左右雙邊、板心に英文翻譯彼理日本紀行、卷之〇（卷數を記す）、仙臺大槻氏藏とある墨刷の枠を施し、本文は漢字片假名交り、每半丁二十字、正楷を以て淨寫されてゐる。序文二丁、目次二丁、本文通計四百二十五丁、外に挿畫九圖より成る。

ペリー日本紀行の最初の日本譯（幸田成友）

（四九九）

一



第1圖 三井文庫本彼理日本紀行卷一表紙

序文は文久二年四月磐溪大槻清崇の作で、半葉八行二枚に亙り、まことに巧妙にペリ日本訪問の成功の理由を説き、甲寅の事、これによつて日本の福とすべしと論結してゐる。自筆ではないが、首尾に同人所用の朱印があるのみか、筆者の敬齋工藤精義の氏名印影まである。次にその全文を掲げて置かう。

嗚乎甲寅之事、皇國開鎖之所由判、豈非天地一大變局耶、其誰使之然、雖曰天運所循環、抑亦以亞虜彼理、投其機會而已矣、夫投機行之、千載固鎖之國、且無不可開、而況於決死從事乎、是彼理紀行之所以爲後人之鑒、而譯焉以傳諸世、其豈得己乎哉、吾於是乎有可告讀者焉、詩曰他山之石可以爲錯、彼之言不必皆藥石也、而我取爲錯可以攻吾玉矣、傳又曰言之者無罪、聞之者以戒彼之所言固不爲無罪也、而我聞以爲戒、豈不足補吾短哉、能達此理、然後是書始可讀也、否則是頭痛之書扯裂擲地之不暇、誰敢手披而口誦之哉、抑吾又有欲言不能已者、夫國一開矣、不可復鎖也、不待智者而後知之、乃因其一開棄其舊以新是圖、則甲寅之事、我可以轉爲福矣、轉而爲福者、豈謂區々貿易之末哉、方將有易國體、改軍政、以大興富強之業者矣、嗚乎誰歟、興富強之業者、余日跂而望之

皇文久壬戌夏四月

磐溪大槻清崇識

文久二年といへば西紀一八六二年に當る。原本が亞米利加で出版せられたのが一八五六年、咸臨丸に塔じて米國に航した木村攝津守喜毅が、彼の地で獲た原本一部を磐溪に贈つたのが萬延元年、それから二年經てこの譯本が出来たのである。之をペリー旅行記の最初の翻譯と認めて毛頭差支なからうと信ずる。

ペリーの日本紀行の原本はフランス・エル・ホークス Francis L. Hawks の編輯にかゝり、一八五六年元老院及び衆議院から出版せられ、前者は大本三冊本及び四冊本二種、また後者は三冊本のみであるが、内容は全然同一である。別にアップルトン會社出版の町版があるが、之は前記官版の卷一所載の旅行記本文に附録二篇を添加したに止まる。

因みに慶大圖書館所藏寫本「亞行御用留」(筆者未詳)の萬延元年四月十八日の條によると、大統領から將軍並に新見・村垣・小栗の正副三全權へそれ〴〵贈呈した「ペルリ日本行記」は「全四冊」であり、また外國事務宰相(外國奉行の意ならん)へ贈られた分は「全三冊」であつたとの記載があるから、遣米使節は四冊本、三冊本の兩種を齎し歸つてゐることが判る。しかし三冊本が元老院版、衆議院版の孰れであつたか、また翻譯に使用せられた木村攝津守の將來本が何であつたかは未だ知り得ない。

磐溪の彼理日本紀行譯文が全譯でないことは論ずるまでもない。即ち左表に示す通り、譯者は緒論、第一章乃至第十章、第十五章乃至第十七章、第二十五章及び補遺を省き、直接日本の開國に關係を有する第十二章乃至第十四章及び第十八章乃至二十四章、合計二〇四頁に對し、四百三十丁を以て忠實な翻譯を試みたことが知られる。

表に目次とあるは譯者の創意にかゝる。上段の數字は譯本の卷數・丁數を示し、下段は譯文が原本第一卷の第何章何頁より何頁に至るやを示す。

ペリー日本紀行の最初の日本譯(幸田成友)

譯本の卷數	譯本の丁數	譯本の目次	原本の章數	原本の頁碼
一	三三	彼理琉球那覇ノ港ヨリ日本へ出帆ノ事	一一	二二八—二四二
二	五三	江戸都府ヨリ返答ノ事	一三	二四三—二六一
三	三〇	浦賀ニテノ事件并彼理浦賀ヲ出帆ノ事	一四	二六二—二七三
四	五五	彼理琉球ヨリ再ヒ日本ニ來ル事并ニ合衆國日本兩國ノ官吏應接ノ場所評定ノ事	一八	三二一—三四二
五	四二	彼理日本ノ高官人ト會話ノ事	一九	三四三—三六六
六	三八	彼理日本ト和親ヲ結ビ條約ヲ定ムル事	二〇	三六七—三九二
七	三二	彼理神奈川ヨリ下田へ赴ク事	二一	三九三—四一四
八	三九	彼理下田港ニ逗留ノ事并箱館へ發向ノ事	二二	四一五—四三二
九	五四	彼理箱館ニ到着ノ事并箱館ノ形勢及ビ風俗ノ事	二三	四三三—四六六
一〇	四六	彼理箱館ヨリ再ヒ下田ニ至ル事并下田ヨリ本國へ歸帆ノ事	二四	四六七—四九〇

譯本を開いて讀むこと數葉、先づ異様に感じたのは、固有名詞の發音が我等が學習したそれと著しく相違することである。Susquehannaを「シユスコイ（ンナ）」Mississippiを「ミスシッポウ」Plymouthを「プリモッチ」Supplyを「シユップリ」といふ類だ。寒暖計が驗溫計、<sup>ボタン</sup>扣鈕が結節、水先案内が港師といふ類の譯字にも辟易した。然し我等は是等の發音や譯字に出會する毎に、初期の外國文學翻譯者の嘗めた苦心に同情感謝すべきことを覺つた。殊に<sup>センテンス</sup>一文の完結する毎に〇（白丸）を施し、<sup>パラグラフ</sup>節を代へる毎に行を改めてゐる。その細心の用意には頗る敬服したが、後半以後は

この區別は輕視せられ、數節に跨る原文が譯文にては一節に連結せられ、彼我の對照容易ならざる不便を生じた。卷九三十四丁裏より四十丁裏に至る一節はその一例である。

本文に對する譯者の註解は割註となつてゐるので容易に區別せられる。然し卷四冒頭の數行と、卷十最後の數行とは、譯者の註解であるに拘らず、本文同様に記されてゐる。それから原本にある底註は何う取扱はれてゐるかと思れば、或ものは譯載せられ、或ものは省略せられてゐる。例へば第十八章の初にある蘭領印度總督ファン・トキストが將軍の薨去をペリーに報じた手簡とその回答とは省略せられ、第十九章にある日本側への贈品目錄が全部譯載せられて本文中にある類である。譯者は何を標準として底註の採否を決したか、我等は毫も之を知る由がない。本文中でも日本人の風俗習慣に關する條は、多少辭句を簡略にする傾が窺はれる。我等に取つて周知のことであるからであらうが、第二十三章中、日本の版畫及び彫刻に關し、前後で數節が脱してゐるのは、餘りにも著しい省略といふべきだ。

ペリーは嘉永六年六月艦隊を率ゐて浦賀に入り、久里濱に幕吏と會見、合衆國大統領ファイルモアの書翰を引渡し、翌安政元年正月再び來り、三月横濱村で和親條約十二ヶ條を、又五月下田でその附録十三ヶ條を議定するに至つた。日本紀行の著者ホークスはペリーの依頼により同人及び部下將校の手記報告を材料としてこの顛末を細敍したものであるから、條約・諸規定の正文、日米當事者の對話筆記等を掲げるは勿論、同時に米國將士の見聞せる沿岸町村の地理、住民の衣食・家屋・職業・宗教・人情・風俗等に論及し、その理解を容易ならしめんために、數多の圖版を加へている。

挿畫には木口彫コグチの木版畫と石版畫とがある。石版畫の大部分は獨逸人の畫家キルヘルム・ハイネの寫生畫か又は銀板寫眞師ブラウンが撮つた寫眞に基つたもので、自然をハイネ、人物をブランから取つた合作もある。石版畫の數は甚だ

多く、原本卷一所載の分通計約九十圖に及ぶ。その中三點は日本の錦繪及び繪本の複製で、けばけばしい色彩が加へられてあるが、他は皆薄い樺色か青色を施して畫面の沈着を計つてゐる。譯本所載の挿畫は左記目錄の通り僅々九點、皆毛筆によつて描く所、然も第一圖ペリー肖像は原本に無いが殘る八點は描寫といひ彩色といひ巧妙を極め、單に忠實な原畫の複寫と言ふのみでは譽め足りないと思ふ。これは本書を一覽せられた知己諸君が異口同音に嘆賞せられるところだから決して一己の私見ではない。それにしても畫工の氏名の判明せぬは遺憾千萬である。

錦繪の一は廣重の京都名所淀川、また一は同人の大井川歩行渡の圖である。錦繪を亞米利加に紹介したはホークスの著が嚆矢である。

譯本の卷數	譯本の丁數	目次	畫家	原本の章數	原本の頁數
(1) 一	序文—目次 一一—一二	水師提督兼日本使節彼理肖像	ハイネ	ナシ	ナシ
(2) 二	三六—三七	江戸灣浦賀風景圖	ハイネ	一三	二五六
(3) 三	一七—一八	亞人久里濱上陸圖	ハイネ	一四	二六八
(4) 四	九—一〇	江戸灣鳥ヶ崎眺望圖	ハイネ及びワルキー	一八	三二五
(5) 五	五—六	小田原灣逢烈風圖	ピーター	一九	三四六
(6) 六	七—八	彼理於橫濱應接圖	ピーター	二〇	三七一
(7) 七	一四—一五	日本人橫濱角力圖	ハイネ	二〇	三七五
(8) 八	一一—一二	船中饗日本人圖	ハイネ	一九	三五三
(9) 九		江戸灣某島眺望圖	ハイネ	一九	三五三

(1)は寫眞によつたものと思はれる。(9)は原本に Webster island とあり、之に充つる島名なきため、假に某島としたのであら

う。原本第十九章にある本圖を譯本第二十一章に移したは、本章に於いてペリーが同島に上り、周圍の風光に最後の一瞥を試みた記事があるからで、決して譯者の粗漏ではない。

以上の記事により、自分が借覽した彼理日本紀行翻譯の顛末と同書の内容とは、大略讀者の了解を得たと思ふ。この稀有の寫本は何人の舊藏であるか。毎卷に「宗辰所集」及び「三井家」の二藏書印があるので、本書が三井家の一門高辰トキ（法號宗辰）の舊藏であることを知つた。高辰は京都に住して大正十一年五月に同地で逝去して居るから、本書が同氏の手に入つた年月を逝去以前と推定し得ることは出来るが、本書の傳來や同氏入手の經路等は何にも判明せぬ。卷頭の序文は磬溪の自筆ではないが、首尾に同人の印があるし、又用紙に仙臺大槻氏藏板とある所から推測すると、或る時大槻家で本書の出版を計畫し、稿本としてこの立派な寫本を調整したが、その計畫は何等かの事情によつて中止せられ、稿本は遂に同家または出版者の手を離れるに至つたものであらう。

磬溪事略によると、磬溪が主君伊達慶邦に上つた一部は自筆だといふが、之は主君嘉納の後伊達家の文庫に收められたか、それとも一覽後磬溪に返附せられたか判定に苦しむが、兎に角大槻家に稿本の傳はつてゐるべきことは當然推測せられる。そこで大槻家本を搜索するうち、之に先立つて偶然出現したのは伊達家本であつた。

尤も自分は最初伊達家本の存在することすら知らなかつた。來訪の同志に三井本を示して、類本の存否を糺したが、一日酒井一誠堂主人から最近同店で購入した伊達本の藏本中に本書一部十冊ありしと聞き、その閱覽を懇請したが、それから間もなく、十一月下旬白木屋開催の古書即賣展覽會目錄に「彼理日本紀行仙臺大槻磬溪譯 一〇冊 一〇〇〇圓」寫本 伊達家本とあるを發見した。



自分は歩行不自由外出容易ならぬため、書肆楠林南陽堂主人に一覽の上遠慮なき意見を聞かせてくれと依頼した。同君は古書展の開會日に早速出掛けてくれたが、三井本の挿畫の巧妙と本文の善寫とに驚嘆した一人である同君としては容易に伊達本に満足する能はず、同君と自分と彼是問答をしてゐる間に、その書物は何人かに購ひ去られた。

この失敗の原因は自分にあるものと十分知りながら尙諦めかねてゐると、十二月半頃、靜岡市北安東町の木村幾久彌氏から一通の封書が届いた。

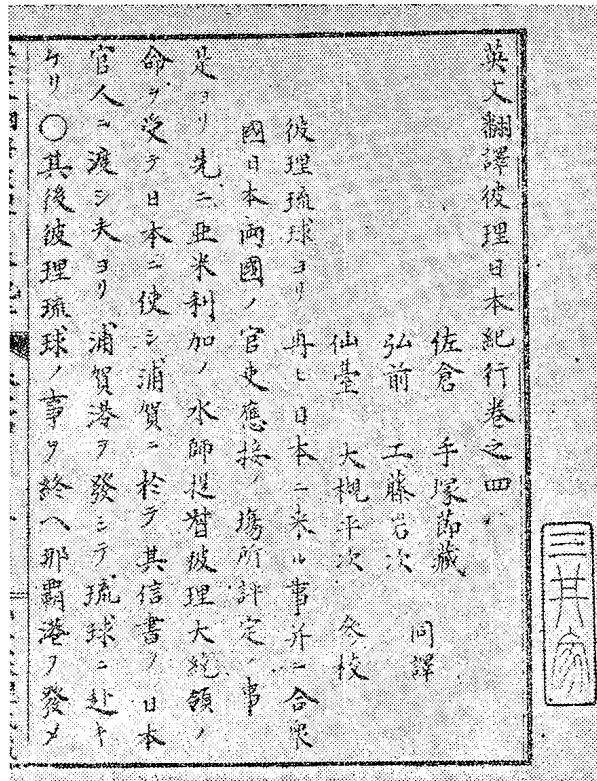
木村氏には面識の記憶がないから、訝りながら開封黙讀すると、未だ數行ならずして自分は我知らず歡喜の聲を擧げた。古書展出陳の日本紀行を買入れたは、自分だ。先生は自分を御承知なからうが、自分は慶應義塾で先生の講義を拜聴した一人である。塾の經濟科を卒業して大學院に入り、亞米利加經濟史を専攻しました。目下病氣のため歸國療養中ですが、研究材料蒐集には相變はず勉めてゐます。今度取寄せた伊達本の中に、先生が一誠堂に宛て、同書を珍本なりと認められた葉書が入つてゐたので、突然ながら一書を呈し、これが日本紀行の最初の邦譯であるか否かを御伺ひします、といふのが手紙の大意である。爾來自分と木村氏との間に書信を往復すること數回、氏の深重なる好意により、同書を借覽し得ることゝなつた。

同書卷末の奥書によつて、この書は磐溪に翻譯を命じた仙臺藩主第二十九世伊達慶邦の子菊重郎が、明治二十五年、磐溪の子修二（如電）から借覽謄寫したものであることが知れる。更に卷末には三井本に存しない磐溪自筆の奥書が次の通り影寫されてゐる。

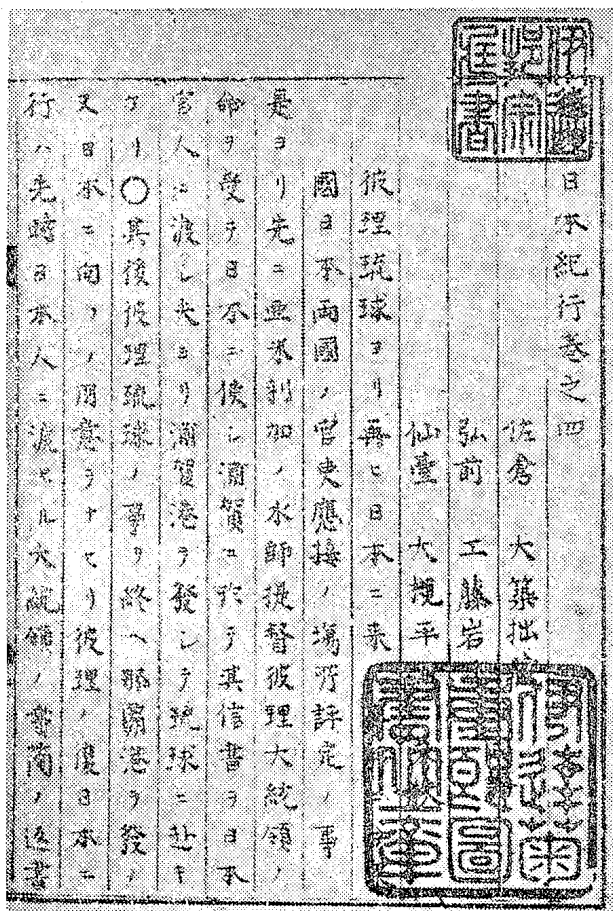
彼理紀行譯成、余以壬戌首夏一起謄寫之業、且校且筆、中間作輟數十日、閏八月初三全部卒業、六十二老人磐溪

崇識 圖圖

之によると、壬戌首夏即ち文久二年四月から校正謄寫を並び行ひ、途中で休んだこともあつたが、八月三日に至つて全部成功したのだ。途中で數十日休んだとあるは聊か大袈裟だが、兎に角百日前後で校正兼筆寫を完了した譯だ。蘭學に通じ漢詩漢文に長じた磐溪のことゝて、その校正は推稱するに足るものであつたらうが、譯者手塚・工藤等の草稿が存在せぬから、例を舉げて立證することは出来ぬ。



(上) 第2圖 三井文庫本卷四卷頭  
(下) 第3圖 伊達家本同上



伊達家本を三井本と比べると、後者に存する精良なる挿畫を缺くほか、譯者が異つてゐるのが妙である。即ち卷一か

ペリー日本紀行の最初の日本譯 (幸田成友)

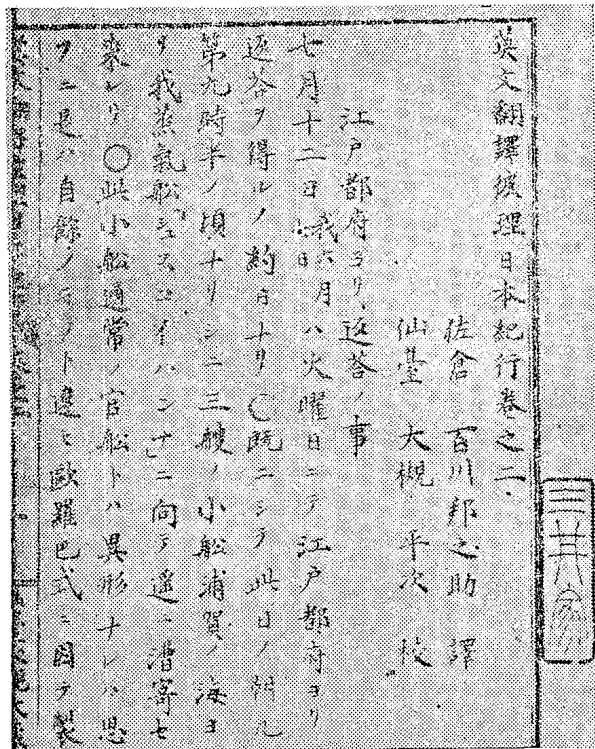
(五〇七)

九

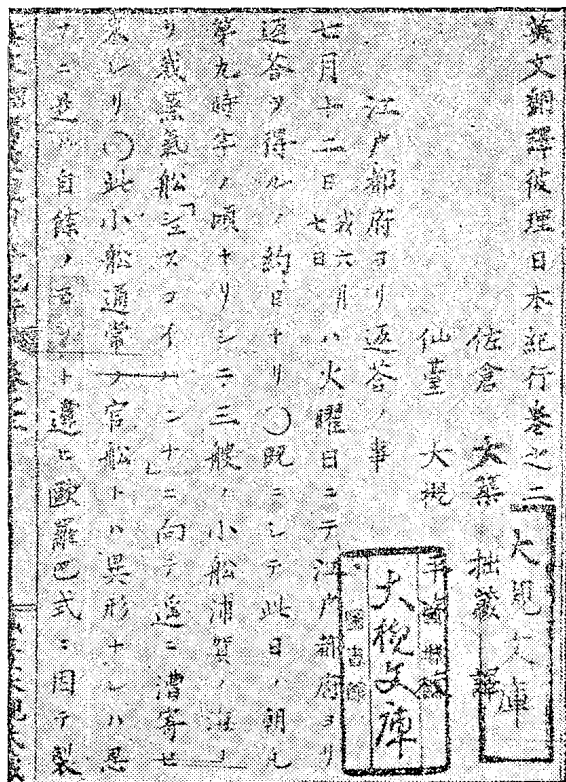
ら三までが大築拙藏、卷四以下は大築拙藏・工藤岩次同譯とあつて、三井本の譯者四名中、今泉・百川兩名が見えず、手塚節藏の代りに大築拙藏の名が記されてゐる。

ペリー紀行の譯者については、如電の新撰洋學年表文久二年の項に「彼理日本紀行 手塚節藏工藤岩次合譯」と書かれてをり、また如電文彦二子口授、孫茂雄等筆記になる磐溪事略に次の如き一節がある。磐溪は木村攝津守から日本紀行を贈られ、大悦びで早速それを仙臺の君公（伊達慶邦）へ差出した所、原書では解らぬ、翻譯して御覽に入れろとあつた。當時はまだ英文を十分に咀嚼翻譯し得る人が少い。漸く佐倉人手塚拙藏、津輕人工藤岩次の二人を得て、わが家へ寄宿させること一年ばかり、文久二年四月を以て翻譯出來となつた。そこで書名を彼理日本紀行と付け、一部十卷、磐溪手づから謄寫して君公の御覽に入れ、御褒美として白銀十枚を贈つた、と述べてゐる。即ちここでは、譯者は手塚拙藏、工藤岩次の二名とされてゐるのである。

譯者についての此等の疑問の一部は、宮城縣立圖書館所藏大槻文庫中の大槻家本を、同圖書館長佐々久氏の御好意で一見するに及んで解決することを得た。大槻本は明らかに上述した伊達本の原本であつて、卷末の奥書は磐溪の自筆である。この書の用紙は板心に英文翻譯彼理日本紀行卷之〇（卷數を記す）、仙臺大槻氏藏とあり、三井本のそれと同じものである。但し挿圖は卷頭にペリー肖像と卷九に將棋盤の圖の二葉を存するのみで、三井本に存する八葉はない。さてこの大槻本の各卷首にある譯者の記載は貼紙によつて訂正が施してあるのである。貼紙下をすかして見るとそこに書かれてゐる譯者名は、全て三井本と同一で、卷一は今泉謙藏、卷二・三は百川邦之助、卷四―十は手塚節藏・工藤岩次である。貼紙は今泉・百川・手塚三名の上に貼られてゐて、之を大築拙藏と訂正してゐる。



第4圖 三井文庫本第二卷卷頭

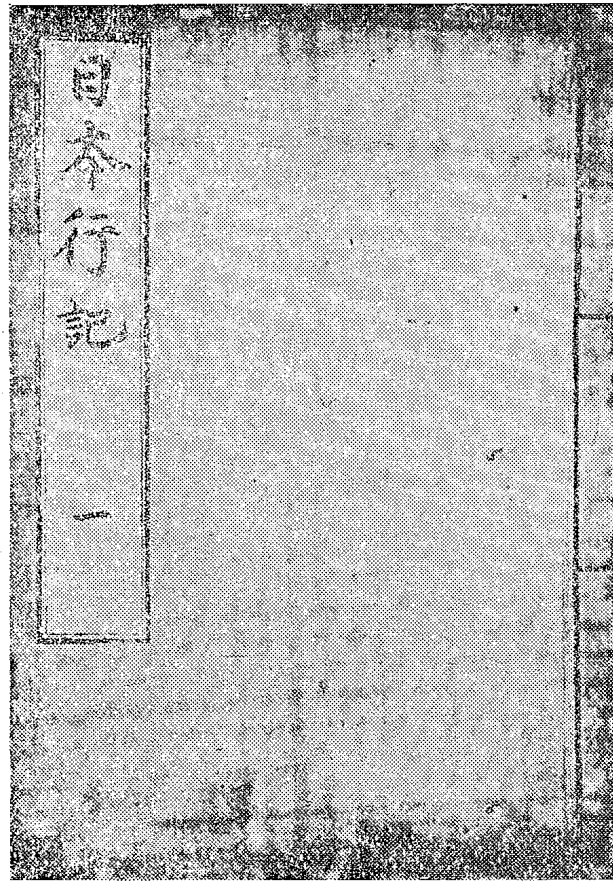


第5圖 宮城縣圖書館本第二卷卷頭

竹村覺氏著「日本英學發達史」四四頁には、勝俣銓吉郎教授の教示によるとして、次の如き記述がある。手塚節藏は初め佐倉の手塚律藏（蕃書調所に於ける最初の英語教授手傳出役）の弟子であつたが、律藏がその才を愛して養子となし、夭折した好學の甥の名をとつて節藏と改名させた。節藏は律藏の代りに仙臺侯に仕へてゐたが、大槻磐溪は之をその第三女雪女と娶せ養子とした、といふのである。

磐溪事略にも、磐溪が明治四年に東京へ移住した折の本所若宮町の家は「婚の大築拙藏の所有」であつたこと、大築は手塚の「復姓」で、雪女を妻としたとの記事がある。

ペリー日本紀行の最初の日本譯（幸田成友）



第6圖 幸田本日本行記第一卷表紙

これによつて、手塚節藏（拙藏）と大築拙藏とが同一人であることが判り、従つて、大槻本が手塚節藏を大築拙藏と改めたのは、同人が大槻家の養子となつた後に行つた當然の訂正であることが判明したが、それにしても何故、當初譯者として明記されてゐた今泉・百川兩人の分をも拙藏と訂正したのか、その理由は今以て知ることを得ぬ。兩人の傳と共に、後考に俟つこととする。尙洋學年表、磐溪事略の記事はこの訂正に基いた記述に違ひないであらう。

書簡を受取るに先立ち、書肆南陽堂主人からも葉書が届いた。曰く先生勇氣を落したまうな。小店十二月の販賣目錄にペリーの日本紀行一部十冊の寫本を載せました、若し御入用でしたら早速持參致しますと。自分は驚き且つ訝り、繰返して葉書を見たが、主人の自筆に相違ない。早速買入の註文を發し、一刻千秋の思で主人の來訪を待構へた。一兩日後主人は風呂敷包を抱へ、悠然として我が家の玄關に立つたが、是日に限り自分は主人の慇懃な挨拶も耳に入らず、靜かに風呂敷を解いて差出す書物を、引手繰るやうに手許へ取寄せ、先づ題簽を見ると、日本紀行となくして日本行記（内題には日本行紀）とある。然しかゝる相違は寫本によくある例として、別段氣にも留めず、ばらばらと數丁を捲ると、

本文は生漉の半紙に無罫ではあるが、毎半丁十行二十字、漢字平假名交りで細書せられることを知った。日本紀行は漢字片假名交りで平假名交りではないが、同一の刊本又は寫本に、兩様の假名が何等の差別なく用ゐられてゐる例もあるので大して怪しみもせず、兩書の冊數、行數、字數が同様でありながら、行記一部の紙數が紀行よりかなり多くはないかと感じただけであつた。

去り乍ら第一卷を繙くと、卷頭にあるべき管の磐溪の漢文の序文がない。これは不審と本文の第一葉を開くと、譯者及び校者の郷貫氏名が無い。心を鎮めて本書の前附を通讀すると、「日本行紀原序」に次いで、著者から本書をコスモスの著書アレキサンダー・フォン・フンボルトに獻呈する旨を記した數行を載せ、之に次いでキルヘルム・ハイネとフォン・フンボルトとの間に交換せられた二通の書翰（一八五五年十二月及び五六年一月）がある。本書がハイネの著述であることは明白だ。

日本紀行の挿畫の多數がハイネの作であることは前に述べた。彼はドレスデン生れの畫家兼旅行家で、俳優を父とするといふ。三十餘歳で中央亞米利加を旅行し、處女作として「中米の旅畫師」を出したといへば、文筆の方も得意であつたらしい。ペリーの日本遠征の報を聞くや、請うて之に加り、その結果日本紀行の姉妹篇とも稱すべき本書を著述したので、原題を *Reise um die Erde nach Japan an Bord der Expeditions-Escadre unter Commodore M. C. Perry*、……といふ。一八五六年刊行、四六二倍判二冊本である。上卷は前附一六頁・本文二八〇頁（緒言、第一章―第二十章、史料二八三―三二二頁）、下卷は前附八頁・本文二四六頁（第二十一章―第三十五章、史料三篇二八九―三七五頁）、この中、緒言及び三十五章より成る本書の主要部は全部邦文に譯出せられてゐる。ハイネの寫生畫を木版にしたものが原

本上卷に六圖、下卷に五圖あるが、譯本にはない。

ハイネは日本行記出版以後、引續き「支那、日本及びオコック海遠征記」一八五八年—五九年三冊「日本とその住民」一八六〇年一冊「北半球に於ける世界旅行記」一八六四年二冊「日本、その國土と住民に對する研究」一八七八年—八〇年二冊等を出版してゐるが、この中「北半球旅行記」は彼がオイレンベルグ伯の指揮するプロシヤ艦隊に乘組み、日本及び東洋諸國を訪問した記事として有名だ。（一八一七年生—一八八五年歿）

何人が如何なる動機で何年に本書を翻譯したか、確證を擧げて説明し難い。譯本第六編原本章とあるを編と譯してゐる新嘉坡沿岸の蘭荳蔻栽培地縱覽の條の註に、「按に信嘗て糖藏の荳蔻を譯官某より得て試みけるに云々」とあり、又十七篇森山榮左衛門の條の註に「政明按ずるに前條度々出る浦賀奉行といふは云々」とある。信や政明は譯者に相違なからうが、名だけあつて氏の知れないのは甚だ遺憾である。然し同時に翻譯の下命者と譯者との間に、著しい身分の高下あることも推量せられる。自分が今回偶然に得た譯本には「越國文庫」「圖書寮」の藏印がある。文庫の名に國名を冠し、又寮字を使用し得るは、國持大名に限るであらう。天理圖書館所藏の日本行記には「手許藏書」の印があるといふが、之は君侯御手許備付本の意味である。幕末の外交問題に重きをなした越前福井の藩主松平春嶽が家臣に命じて本書を譯せしめ、一部を御手許本として身邊に備へ、一部を同藩の文庫に納れて藩士の子弟に閱覽を許したとすれば、想像だけでも随分面白いではないか。

翻譯の年代も判明しない。緒言リツチモンド市乾ドックの工費一百万ドルラルといふ條に、「合衆國の錢我三分許にあたる」と註し、又第十八篇支那人がマカオ市長アマラルの首級に四萬タエルを賭けた條に、「一タエルは凡銀十匁と

いへば、四萬タエルは四百貫目にして、凡そ六千兩餘とす」と注してゐる。是等によると、貨幣の計算法に兩・分のあつた時代、つまり明治初年以前の翻譯であることは疑ひない。更に河北展生氏所藏の抄寫本（三冊）奥書に「文久三年正月五十嵐正之寫」とある由であるから、翻譯が文久三年以前に係ることまでは確實である。

譯文は決して名譯とは言へない。文意の不十分な所もあり、原本と一々對照したら、或は若干の誤譯をも發見し得るかも知れない。献呈<sup>ラヂーシヨ</sup>といふことが、まだ我國の學者間に不明であつたためか、ハイネがフォン・フンボルトに與へた書翰の冒頭にある *Werther hochverehrter Herr* を、「德望ありて大に崇敬する諸君」と譯したため、一篇の手紙は全く意味不通のものとなつてしまつた。これがその一例である。

日本紀行の翻譯に際し、馨溪は英語學者を得るに窮したといへば、獨逸語で書かれた日本行記翻譯の命を拜した何某は獨逸語學者を求むるに方り、馨溪に五倍十倍の苦勞を嘗めたであらう、と想像するに無理ではあるまい。然しこの想像は全く見當違ひであつた。日本行記は獨文原本に據つて翻譯したのではなく、和蘭文の譯本から重譯したのである。その證は譯本の卷頭にある「日本行紀原序」である。この一文は實は原序でなく、ロツテルダムに於ける蘭譯の出版者が讀者に告ぐる文で、日附の一八五六年十一月は著者ハイネとフォン・フルボルトとが書翰を往復してから約一年後に當つてゐるではないか。

自分の手にしたハイネの旅行記の譯本は以上の通りであるが、同種の寫本は必ずしも稀少ではない。三井高辰氏の蒐集本中にも一本がある。雁皮紙に書寫した五冊から成る上寫本である。その内容は、原本の第十三篇「初て琉球に至りし記」から始まり、第二十七篇に終つてをり、家藏本の第四冊目の中途から、第八冊目の初めの部分までに相當する。見



返しに「鞠山文庫」「魯堂」の二印が存する。印の立派な點から見て、この書も藩主級の然るべき大家の舊藏書と推測する。

ペリリ來航の際、浦賀の警衛に衝つた信州松代藩主眞田家にも假綴十二冊の一本があり、現在文部省史料館に保存されてゐる。眞田家本は三井高辰本と同じく、原本第十二篇から始つてゐるが、第二十三篇までしかない。然もその間、第十九・二十・二十二篇を缺く零本である。たゞ、眞田家本には本文の他に、第二、被理日本紀行附考第四編ノ下及び表題のない己十一月松平肥前守上表の寫各一冊が添つてゐる。この中、附考第二の「合衆國の大統領より日帝に奉る書」は原本第一卷二九八—三〇一頁にある *Dokumente III* の翻譯であり、附考第三篇「一千八百五十三年第七月始て事端を開くか爲にコムモドレベルリ日本の官人と爲したる會議の間の事件に就てコムモトレベルリよ海軍のマリネ（官名）に報せし公翰の模帳」は *Dokumente IV* (pp. 302—321) の抄譯である。（原本三一—一頁六行目—二十五行目省略、三一—三頁十行目—十六行要約、三一—三頁十七行目—三一—四頁十八行目省略）更に附考第四篇ノ下は、原書第二卷 *Dokumente I* の後半 (pp. 302—321) の抄譯であるが、「請すへき事を報ぜり」と書き始められてゐるから、もと前半部の存したことが明らかである。

このやうに眞田家本の附録の部分をハイネの原本と對照してみると、譯業は家藏本によつて知れる通り本文全體について行はれたと共に、原本の史料篇の一部に及んでゐたかと考へられる。然し乍ら眞田家本の附録には、原本とは無關係の松平肥前守の上表の寫も添へてゐる點から見ると、此等附録の部分は、眞田家で寫本を作成する際に、他の書物から寫し取つて添附したと想像されぬでもない。

富永牧太氏の來示によると、天理圖書館には長州寺師宗徳の翻譯にかゝる「ペルリ航海日誌」二十冊のほか、ハイネの「日本行紀」二十冊、及び同書の零本で「帳中秘鑑」と題するもの八冊を藏するといふ。日本行紀は前に述べた「手許藏書」の印あるものであるが、帳中秘鑑は本文五冊（第十二篇—第二十九篇）と附録二冊、補遺一冊から成るとのことである。この附録・補遺と眞田家本の附録との異同はどうであらうか、恐らくは他にも存するであらう異本との對校を進めれば、ハイネ紀行の譯業の全貌も明らかにし得るであらう。今は疑ひの儘を記して後考に俟つこととする。

石河幹明氏著、福澤諭吉傳第一卷五二七頁に見ゆる大童信太夫宛十月廿四日付の書翰（年次未詳）に「……私義本月初旬より散々風邪にて外出仕兼、無聊の餘り先日拜借仕候ペルリ紀行取調居所面白ケ條有之候、則少し計翻譯仕候間入御覽申候、鎖國家の目に觸候はゞ何と申哉、何卒頑固物の諭し種に御用可被下候」との一節があつて、福澤先生もペルリ遠征記の一部を譯出した事實が知られる。茲に自分の記した大槻一門のペルリ紀行、譯者未詳のハイネ紀行の翻譯は、共に上梓せられるには至らなかつたけれども、寫本として流布し、味讀せられた範圍は必ずしも狹少でなかつたと思はれ、讀者の眼を開かしむるに足りたであらう。

附記「これはわたしの最後の論文だから何とか纏めてほしい」　ご納得下さらない。もう少し調べて呉れど仰しやるのが常だつと、一旦清書された原稿に無数の訂正・加筆を施された草稿を先　た。そうした檢討の時間、先生のお顔はいつも生々として、且つ生からお渡しただいて、匆忙一年半の時間が過ぎた。それはもと　妥協を許さない俊嚴さを崩されなかつた。原稿は何度か書き替へより私の怠惰によるものであるが、また必ずしもその故のみでは　た。急がなくていゝよといつも仰しやるのだが、暫くご無沙汰をなかつた。判らない所は判らないと斷つて一應纏めようよ、と言　するとお葉書がくる。旅行する時は必ず日程をお知らせするやうはれ乍らも、調べた範圍で書いてお持ちすると、やはりそれでは　に心掛けたつもりだったが、歸宅してみると、きまつてお葉書の

一兩通を机上に見出した。宮城縣圖書館長佐々久氏のご厚意で、大槻家本をお見せすることができた時は、ほんとうに嬉しかった。天理圖書館本を検討する期を得なかつたのが最後まで心残りであつた。元氣ならわたしが行つて見てくるのだが、と仰しやられたときの心苦さ。もう先生にご報告するすべはなくなつたけれども、機會を得て必ず閲覽してくることを、私は心にきめている。

この論文は、既に二年前に一旦先生が完成されたのである。そしてある綜合雜誌への掲載を小泉信三先生がご配慮になり、そのため學生の手で淨書され、富田正文氏が檢合に當たられる程の慎重な手筈がふまれた。生憎その雜誌が編輯方針を變更したために、發表は實現を見ず、淨寫稿本は先生の手に戻つた。その間も研究を怠られなかつた先生は、淨寫された草稿に訂正増補を施され、ついに殆ど原形をとどめぬまでに至つた。そして氣力の衰へを數ぜらるまゝ、私に纏め方をお命じになつたのである。その後事情は前述の通りである。私は同門の先輩會田倉吉氏に多くのご教示を仰いだ。先生の加筆された草稿の末尾に「最後に小泉信三氏の厚意に與りし事、中井君の世話になりたる事を書き加へたし」とあるので、以上代つて本稿の成れる経緯を記した。

漸く原稿が纏り、挿圖の打合せを済ませた時が、先生にお目にかゝつた最後となつた。原稿を三田史學會の編輯擔當者鈴木泰平君に手渡し、初校を先生のお目にかけるよう依頼した日、たま

先生の病重き旨を聞き暗然として歸つた。そして兩三日にして先生の計報をうけた。ご冗談をと打消した「最後の論文」が遂にその通りになつてしまひ、それも遂に活字にしてお目にかけることが出來ずにしまつた。怠慢の責を、私は永く心にきざんで、先生へのおわびと追憶のよすがとする。

大槻一門によるペリー紀行翻譯のことについては、本稿に扱はれた書誌學的問題のほかにも、なほ多くの問題が含まれてゐる。その一端を窺ふため、原本第二十章神奈川條約締結の一節（大槻譯本卷之六）を、土屋・玉城兩氏共譯文と大槻譯文とを並記して見る。

吾が政府によつて、日本の遠征隊派遣が決定されたとき、當局者達は、かの特異な國民獨特の特徵に留意しないわけではなかつた。他のあらゆる文明國民とは異り、同國は自ら進んで、長い間全く孤立の状態に在つた。他の國々との交通を希望もせず、求めもせず、却つて、それを極力防がうと努力した。世界のあらゆる部分からの船舶が港々に自由に訪問する國に對して、通商條約の諸條項を提案するのは比較的容易な事柄である。かゝる國々は、通商自身を國家制度の一部と認めてゐるのであり、それを許すといふ原則は習慣上自由に承認されてゐる。……然し通商自體が禁止されてをり、法律に反することになつてゐる國家に於てはこれと異なる。（土屋・

玉城譯、下卷六四一頁)

初メ合衆國ノ使者ヲ日本ニ遣ハシテ和親ノ事ヲ謀ラントセシトキ合衆國ニテモ頗ル日本ノ國體ヲ知居タリ、夫日本ハ境土狹小ニシテ人情偏僻ニ鎖國ノ論ヲ守リテ外國ト交通セス、今之ニ和親ノ論ヲ示シテ鎖國ノ說ヲ排斥セントスルハ誠ニ難事ナルヘシ、然トモ天下諸國ノ形勢ヲ觀ニ皆和親ヲ貴ヒ交商ヲ盛ニシ未偏僻ノ議論ヲ建テ、外國ノ交接ヲ拒ク者アラス、然レハ今日日本ハ其上地褊小ナリト雖モ亦國ナリ、國ハ以テ外國ト交接セスンハアルヘカラス、國ハ以テ外國ト貿易セスンハアルヘカラス、天下豈和親交商ノ說ヲ聽サルノ國アラシヤ、理ヲ以テ之ヲ觀ルニ日本ノ鎖國ヲ開クモ亦難カラス、然トモ之ヲ開クニ順序アリ、其次ヲ逐スンハアルヘカラス、速ニ成シテ事ヲ求ムルトキハ却テ其謀ヲ破ル(大槻譯本卷之六、廿六丁)

本論中に述べられてゐる通り、磐溪は手塚らの譯校全體に亘つて校正の筆を加へたのである。校正の實際は之を詳に爲し得ないが、こゝに引用した部分の如きは、開國論者として磐溪の意見が、原文の意譯のうちに表示されたものと見て良いのではあるまいか。この譯書は藩侯の御覽に供すると共に、公刊を豫定して行はれたと思はれる。そのために、鎖國論者を無用に刺戟する恐れある部分に手心を加へ、また反面に開國の自說を適宜盛り込むこ

ペリー日本紀行の最初の日本譯(幸田成友)

とを心がけたあとが散見される。引用文はその一例に過ぎないのであり、そこに磐溪校正の業の主たる内容は存したと思はれる。單純なる翻譯である以上に、本譯書はその有する歴史的性格を更に詳細に検討したのちに評價されるべき内容を持つてゐるのである。(昭和二十九年八月四日、中井信彦記)

### 幸田成友博士の訃

昭和二十九年五月十五日午後十時三十九分、文學博士幸田成友先生が逝去せられた。享年八十一歳。同十八日午後一時自宅に於て佛式により葬儀、二時より三時まで告別式、會葬者多く盛儀であつた。吉田が三田史學會を代表して左の弔辭を讀んだ。

#### 弔辭

私達の幸田先生がとう／＼遠いところへ行つてしまはれました。先生は學者として私達を導き、人間として身近かにお附合ひ下さいました。先生の學風は堂々と本道を行き、同時に必ず裏道零細な露路に至るまで限なく窮め、精緻嚴正一言一句たりとも苟くもせず、常に眞實を求めて結論を急がず、眞に歴史を學ぶものゝ師表と仰ぐべき態度でした。特に銘記して忘れがたいのは、テキスト・クリティークで、口癖のやうにいつて誠め

(五一七) 一九

られた「オリヂナルに還れ」の一言、私達の心に大切に藏つておきたいと思ひます。

然し一度教室を離れ、學問を離れて平生のお附合になると、先生はユーモアに富みベランメイも出る特異の話術で濫かく私達をつゝんで下さいました。目をつぶつて先生を偲べば、先生の濫容忽ちいたつて、汲めども盡きぬ話題、あの艶のあるお聲が聞へてくるやうです。

先生の教を受けた三田の史學會同人、夫々別々の形で永く先生を記憶にとゞめ感謝の心を忘れないでせう。先生どうもありがとうございました。今後共私達をお見護り下さい。

昭和二十九年五月十八日

三田史學會

吉田小五郎

先生は明治六年三月九日、東京神田山本町で舊幕臣（表坊主の家）幸田成延の第五男（四男鐵四郎が夭逝したため時に四男といはれてゐる）に生れた。成常（舊相模紡績株式會社専務）成忠（即ち郡司大尉）成行（即ち露伴）姉延子、妹安藤幸子（現存）等何れも世に顯れ、我が成友先生も所謂「偉い同胸」の一人であつた。學制發布後の誕生であるから、先生の言葉に従へば、小學校から大學にいたるまで「新教育」を滞りなく受けて、明治二十九年夏七月、東京帝國大學史學科を文字等通り優秀の成績で卒業した。

偶々明治二十九年は哲學に桑木嚴翼、姉崎正治、高山林次郎（樗牛建部遯吾、史學に原勝郎、内田銀藏、瀬川秀雄、國文に武島又次郎（羽衣）笹川種郎（臨風）黒坂勝美、喜田貞吉、大町芳衛（桂月）英文に島文次郎、漢文に桑原隙藏、言語學に金澤庄三郎、小川尙義等々を輩出した年であつた。

明治三十四年五月、二十八歳の若さを以て拔擢せられて大阪市史編纂長として赴任、その業に沈潜奮闘、殆んど先生の全生命を打ちこまれ、八年をけみして同四十二年完成した。爲に先生の頭髪は頓に薄くなつたと傳へられる。實に本邦に於ける本格的な用意と方法とによる市史の嚆矢にして、今日に至るも、群鷄市史中の一鶴たるを失はない。

この業によつて先生の視野は深さと廣さを加へ、且つ方向附けられた感がある。即ち先生の興味は書誌に集中し、専攻は日本經濟史につながれた。大阪に於ける交友が先生の本好きに拍車をかけ、又大阪市史の性質が經濟史に結んだことは當然の成行きといへよう。東京に歸られてからは舊幕府引繼本を丹念に検討され、大阪、江戸の經濟史、主として金融のことに力をそがれたやうである。先生の經濟史が凡そいかなる範疇に屬するかは先生御自身の言葉によつて語つていたゞかう「現在までに日本經濟史を研究した人々は二種に區別せられる。第一は經濟學から入つた人々、第二は歴史から入つた人々で、第一は兎角理論に強くて史料の咀

嚙に弱く、第二は之と反對の傾がある云々。(「凡人の半生」中の内田銀藏博士) 先生が何れの側に屬されるかは言はずして明らかだ。なほ一言しておきたいのは、この大阪市史が名義上大阪市参事會の編纂となつてゐるが、凡そこの種の他の編纂物と異り、徹頭徹尾先生個人の著述に外ならぬといふことである。之は常に先生が自負と責任とを以て推してをられ、嘗て博士論文として提出しようと思はれたことから證據だてられる。(然るに完成された著作には市参事會の名のみあつて、先生個人の著とないとの理由をもつて、却下されたといふ。それは私が直接先生から聞いた話である。)

市史完成後、一時京都帝國大學文科大學の講師となり、次いで大正七年臨時帝室編修官に任ぜられた。又これより先慶應大學講師、東京商科大學に迎へられ、傍ら著述に没頭せられた。

先生は又夙に日歐關係通交史の研究に傾注し、昭和三年三月より同四年十二月まで、命ぜられて主としてオランダに留學、日蘭關係の史料を採訪、更にイギリス、スペイン、ポルトガル、イタリヤ、ギリシヤ等に旅行して、見聞を擴め、史裏を肥した。當時先生は既に五十歳を越へてをられたが、この留學を子供のやうに悦び文字通り莊者をしのぐ猛烈さを以た勉強された。

歸朝後、その成果は着々發表され、相次いで論文、著作集となつた。先生の文章は、自ら(日本經濟史研究序文)「専ら言はん

ペリー日本紀行の最初の日本譯(幸田成友)

と欲するところが誤りなく傳へることを心掛くるのみ」と言はれてゐるが、而も何故か不思議に人を魅し讀ます力がある。

幸田家の客間に先生の恩師田中義成博士の筆になる篇額が掲げられてゐる。宋の趙季仁の語を録すといひ、我に三願あり、一に天下の好人物と交はり、二に天下の好水山を訪ね、三に天下の好書に廻りあひたいといふ意味の言葉が書かれてゐる。先生はこの句をとつてもつて三願書屋と命名され、藏書印にそれを用ひた。

推ふに先生の三願は一も二もなく、たゞ一途に書物のみと申しても差支ない。先生の書物に對する知識と愛情は廣く深く、寧ろ執拗といつて然るべきものであつた。その一端の一端が慶應大學文學部に於ける講義「書誌學」となつた。(更に同大學通信教育部のテキスト「書誌學」となつてあらはれた。) 先生は近年、元氣であられたが、兎角身體之にもなはず、床上に起居されてゐることが多かつた。最後の最期まで書物に明けて書物に暮れ、人訪れて書物の話となれば、常に若々しく甚だ御機嫌であつた。その先生今や莫し、身邊をぐるに淋しさを覺える。

(二九・六・二四)

### 幸田成友著作目録

明治三十九年(三十三歳)

(五一九)

二一

道頓堀芝居棧敷通用鑑札

集古會誌丙午ノ五  
明治三十九年十一月

大阪表における御買米及び御用金  
札差について

大阪市史の編纂について

史學雜誌二六ノ八、九  
三田評論九ノ八、九

明治四十年(三十四歲)

築前阿彌陀經碑

集古會誌丁未ノ五  
明治四十年十一月

増見屋三右衛門日記

大阪朝日新聞  
大正四年ノ八

豊臣時代の大阪

大阪高商、商事研究部編  
課外講演學

大正五年(四十三歲)

歴史地理二六ノ三、四、五

明治四十一年(三十五歲)

豊臣時代大阪海運開鑿考

歴史地理十一ノ一

歴史地理二八ノ一

明治四十三年(三十七歲)

大鹽平八郎

東亞堂書房

天保人別改令(上)

經濟大辭典

升屋小右衛門

大阪朝日新聞  
明治四十三年一月

非人寄場

大正七年(四十五歲)

三田學會雜誌一〇ノ八  
三田學會雜誌一一ノ四

役者總判

大阪毎日新聞  
明治四十三年一月

米切手

大正十年(四十八歲)

三田學會雜誌一二ノ一、二、三

明治四十四年(三十八歲)

懷德堂菑記

穢多頭禪左エ門の生計  
幕府と佐藤信淵

中央史壇二ノ六

大正二年(四十歲)

竹田近江と竹田出雲

集古會誌癸丑ノ三  
大正二年五月

大正十二年(五十歲)

中央史壇五ノ四

大正三年(四十一歲)

大阪と水

大阪毎日新聞  
大正三年七月

大正十三年(五十一歲)

史學二ノ四  
復興叢書五

大正四年(四十二歲)

質屋について

大正十四年(五十二歲)

商學研究四ノ二

- 明治元年の兵庫及大阪  
天保十四年の御用金につき  
武士と町人  
大正十五年(五十三歳)  
御解書留並濱方記録  
昔物語(第一高等在學時代の回顧)  
髮結床の研究  
株仲間の開放  
昭和二年(五十四歳)  
古事記(岩波文庫)  
大歌舞伎外題年鑑  
天保改革の一研究  
日本西教史について  
萬世江戸町鑑  
春宵秋夜談(藏本被刻 三村清三郎氏に依る)  
武士と町人(其一)  
札差雜考其一札差の人名及び株帳  
札差雜考其二札差の業務經營性質證文雛形  
札差雜考其三札差關係書類  
昭和三年(五十五歳)  
日本經濟史研究  
大岡山書店
- 歴史地理四五ノ一  
商學研究五ノ二  
公民講座一五ノ三  
近世社會經濟叢書  
橄欖樹  
商學研究六ノ二  
内藤博士記念論文集  
岩波書店  
歌舞伎研究一四  
史學論叢  
三田文學二ノ九  
江戸時代文化一ノ八  
將官談話會月報一〇七號  
史學七ノ一  
史學七ノ二  
商學研究八ノ二  
大岡山書店
- 讀史餘錄  
杞憂道人  
伊王島の半日  
昭和四年(五十六歳)  
支倉六右エ門の教名  
和蘭に於ける日本最初の留學生  
ユランバスの骨  
ギリシヤ雜筆  
昭和五年(五十七歳)  
聖フランシスコ・ザビエー小傳  
羅馬に在る日本殉教團(口繪説明)  
日本封建經濟史を讀む  
シユールハンマー師を訪ふ  
鹿兒島の耶蘇教徒  
ベレムの塔と上川島  
倫敦で見た二珍本  
日本に關する最近の目錄二部  
西洋古本屋覗き  
歐洲の文書館及び圖書館について  
江戸の町觸申渡について  
大岡山書店  
古本屋昭和三ノ二  
三田評論  
史學八ノ三  
三田評論十月  
一橋新聞  
昭和四年七月  
國史回顧會誌  
史學九ノ二  
改造一二ノ九  
和蘭夜話  
史學九ノ四  
圖書館雜誌一三〇
- ペリー日本紀行の最初の日本譯(幸田成友)  
(五二二) 二三



ペリ日本紀行の最初の日本譯(幸田成友)

昭和六年(五十八歳)

和蘭夜話

書物の話

ジャカトラ追放

デ・シリング師の新著を讀んで

伊東滿所の二書翰

サンデの遺歐使節記につき

シーボルト一家の手紙

シーボルトの「日本」の複製及びその補遺につき

大黒常是考

昭和七年(年五十九歳)

長崎平戸町人別帳二種

アントニウス・ハムブルック

—和蘭の鳥居強右衛門

支倉六右衛門の肖像

附「遺使録」の獨譯本三種

豊後王大友フランシスコの手紙

奈良時代に於ける寺院經濟の研究

所謂寛永鎖國令につきて

新定日本歴史圖解(第一學年用)

(第二學年用)

(五二二)

二四

歴史教育七ノ八

日蘭貿易の話

新刊の洋書目錄數種

兩替年代記を讀んで

昭和八年(六十歳)

カロンの「日本大王國志」について

フランソア・カロンとその周圍

カロンの記事に見へた大名の氏名・居所・石高について

江戸の市制

蘭王キルレム二世の書翰

赤松大三郎

續福澤全集第一卷を讀む

品川町史を讀む

江戸の町觸中後について

羅馬にある西班牙大使館所藏の日本關係書類

昭和九年(六十一歳)

和蘭雜話

江戸と大阪

小西行長とその一族

カロンの子女について

御張紙直段

社會經濟史學二ノ一〇

史學十二ノ二

岩波講座日本歴史

長崎談叢十三

時事新報

昭和八年三月

社會經濟史學二ノ一一

學鑑三七ノ一二

第一書房

富山房

社會經濟史四ノ五

富山房

社會經濟史四ノ五

富山房

富山房

富山房

歐洲一覽

旅と傳説

外國の古本屋

日本古書通信三八

大阪城生残りの二勇士

日本精神講座六

青淵先傳記資料の編纂に就て上

龍門雜誌五六七號

徳川時代の對外策

細野要齋

江戸米會所の創立について

美似都三ノ八

エボラ町

世齋覺書

昭和十一年(六十三歲)

歴史教育二ノ二

三浦安針餘談

和蘭にゐた頃

外遊中の苦樂

社會經濟史學六ノ三

小西行長とその一族

史學一三ノ四

日蓮聖人と統計

花房四ノ五

遠藤芳樹氏

社會經濟史學四ノ一〇

三浦安針

中外商業新報

「御觸書寬保集成」

讀賣新聞昭和九年二月

寛文版の書籍目錄

昭和十一年一月

白石喜太郎著澁澤翁を讀む

史學一四ノ一

書物の置き方

史學十五ノ一

内田恒次郎の手紙

社會經濟史學四ノ一〇

「日本及羅馬二大王国實記」の覆刻について

東京堂月報廿三ノ二

犬の子が生れたために

社會經濟史學四ノ一二

軍艦開陽

讀書感興第二號

石井學士に答ふ

經濟學研究四

一五九六年天草版「イグナシヤス・ロヨラの精神の鍛鍊」補遺

圖書館雜誌三十ノ八

馬込勘解由

學友會誌九

杉浦愛藏外信

三田評論十月號

昭和十年(六十二歲)

書物春秋二五

日本人撰述耶蘇教攻撃書類の翻譯

史學十八ノ二、三號

維新前と維新後

隨筆趣味第四號

福澤先生の「親友」高橋順益

耶蘇會版特に日本字印刷物について

信州追分宿

社會經濟史學

耶蘇會版特に日本字印刷物について

史學十八ノ二、三號

中川得基翁

社會經濟史學

耶蘇會版特に日本字印刷物について

史學十八ノ二、三號

カロン著「日本大王國志」英譯の複製本について

社會經濟史學

耶蘇會版特に日本字印刷物について

史學十八ノ二、三號

「シー・アール・ボックサー」氏の近業―史學十四ノ三

社會經濟史學

耶蘇會版特に日本字印刷物について

史學十八ノ二、三號

本道樂

社會經濟史學

耶蘇會版特に日本字印刷物について

史學十八ノ二、三號

高山賣藥業史史料

社會經濟史學

耶蘇會版特に日本字印刷物について

史學十八ノ二、三號

ペリー日本紀行の最初の日本譯(幸田成友)

(五二二)

二五

ペリー日本紀行の最初の日本譯（幸田成友）

（五二四） 二六

西洋の史料に見へた古き大阪 社會經濟史學六ノ九

昭和十二年（六十四歲）

日本人を主人公とした西洋の古い芝居  
エビダウロスの劇場

古事記改訂版（岩波文庫）

岩波書店

林若吉翁を偲ぶ會

日本古書通信一一二、一一三

内田恒次郎の手記

有終二四ノ六、七

正寶錄の編者

社會經濟史學八ノ一〇

寛政九巳年の和蘭風説書

史學一六ノ三

水木十五堂主人

大和志五卷ノ七

ケンペル雜考

日本における西洋語

天正遣歐使節の肖像畫

學鑑四三ノ七

日本の文化に及ぼした和蘭の影響

番傘・風呂敷・書物

書物展望社

ボクサー大尉の新著を讀む

學鑑四一ノ一

日蘭貨幣及び度量衡考

東京朝日新聞昭和一一四ノ一

江戸の町人の人口

社會經濟史學八ノ一

ストライト師布教關係書籍目錄第十卷

長崎談叢二五

昭和十三年（六十五歲）

統計學雜誌六二七、六二八

齋庭の穂

學鑑四三ノ一一

ペリー遠征記について

古雜誌

經濟往來第四號

カリヤム・アダムスの紀念塔（口繪）

史學十七ノ二

石谷十藏貞清

東京堂年報二六ノ一二

古書目錄

日本古書通信第九號

雜筆（マフエイの印度史その他）

江戸讀本三ノ一

それでよいかしらん

書物展望八ノ三

マダカスカル島沖の迎新

日本古書通信一二四號

公共圖書館

東京堂月報廿五ノ二

天正遣歐使節の肖像畫

交通文化五號

湯宿のけむり

讀書感興第三ノ一

日蘭兩國親交記念碑

學鑑四三ノ七

淨瑠璃太夫と新刀鍛冶

讀書隨筆三月七日

日本耶蘇會古版三部の發見

上智大學教授トクトル・ヨハンネス・ラウレンス

イザーク・チ・ング

一橋論叢一ノ六

古活字本の話

三田國史談話會講演筆記

カロンの翻譯した武鑑の復原

東西交淑史論

古活字本の話

三田國史談話會講演筆記

ペリー遠征記について(追記)

新刊の洋書目録數種(追記)

家兄を憶ふ 廣瀬彦太著「郡司大尉」

濱村民藏「京都古觸書集」について

昭和十五年(六十七歳)

史話東と西

小判と札

ヨハン・ヨゼフ・ホフマン

森丘之處方録

紙の西漸

御朱印

金銀島探検

シヤバ(内田誠著)

書籍涉獵の人

合類書籍目録大全 | 尾崎雅嘉

四十二行聖書は歐洲最古の活字本か

外國雜誌

高橋誠一郎氏著經濟思想史隨筆を讀む

外國書の飢饉

日本經濟史辭典

日本文化史叢

附録

社會經濟史學一〇ノ一

中央公論社

文藝春秋一八ノ一一

科學ペン五ノ一二

實地治療二〇ノ一〇

改造二三ノ一二

交通文化一〇號

中外商業新報

昭和十五年一月

三田文學十五ノ三

三田評論五〇九號

圖書館雜誌三四ノ二

日本古書通信一三四號

三四評論七月號

圖書第五十五號

讀賣新聞昭和十五年二月

大阪朝日新聞十五年一月

ペリー日本紀行の最初の日本譯(幸田成友)

田中萃一郎

C・R・ボクサー氏について

日本歴史の著者通事ヨハン・ロドリゲス神父

一六〇〇年耶蘇會版「おらしよの翻譯」

昭和十六年(六十八歳)

改訂 大鹽平八郎

増補 江戸と大阪

史實の誤解と曲解

新刊物の用紙と製本

日本人ユンスタンチヌス・ツラツス

昭和十七年(六十九歳)

大鹽亂の檄文と札

大鹽平八郎の愛刀

小學生時代

外國語修業

韓佛字典の編纂者

本年日本で出版になつた洋書數部について

フランセスユ・カルレッツチ

一六〇〇年耶蘇會版「おらしよの翻譯」

第三四例會講演

(五二五)

三田評論五〇九號

日本醫事新報九一號

史學一九ノ三

創元社

富山房

歴史十六ノ一

東京堂月報廿八ノ五

書齋五ノ七

現代二三九

中央公論五七ノ八

文藝春秋二〇ノ八

新若人二ノ六

讀書と文獻二ノ五

學鐙四六ノ一二

週刊朝日十一月八日

二七

ペリー日本紀行の最初の日本譯（幸田成友）

書誌學上の用語一二につき

二三の書目について

同名異人

昭和十八年（七十歳）

卒業證書

知己の外人作家五名

伊太利訪書記

ジャワの寶物

新刊圖書館目錄二種について

アベル・ヤンスゾーン・タスマンの前半生 海一三ノ一

南蠻鐵

故内田銀藏博士について

清水三男著「日本中世の村落推薦文」

昭和十九年（七十一歳）

座右の書

隨筆と太田爲三郎氏

妙々奇談とその作者

昭和二十年（七十二歳）

太田教授と吉利支丹研究

昭和二十一年（七十三歳）

書齋六ノ一二

學鑑四六ノ五

三田新聞四八二  
昭和十七年三月

新若人十八年十二月號

學鑑四七ノ一二

日伊文化研究一五

新日新聞昭和一八年一月

圖書館雜誌三七ノ一

日葡交通論叢第四輯

知性六ノ九

文藝一ノ二

三田文學一九ノ六

文藝春秋二二ノ七

文藝一一號

（五二六）

二八

女の地位

釘の頭

シー・アール・ボックサー氏に再會す

幸福な藏書家

嘘か実か

吉野五運

昭和二十三年（七十五歳）

歐洲最近の古本直段

知己外人作家三氏の最近通信

藏書印

書誌學（一）

昭和二十四年（七十六歳）

書誌學（二）

本の話

昭和二十五年（七十七歳）

谷中の家

江戸時代の書目

江戸時代初期の分類目錄

江戸時代の假名別目錄

江戸時代後期の分類目錄

新大阪二九一號

文藝春秋二四ノ六

藝林間歩一ノ一

藝林間歩二ノ五

苦樂二ノ四

戲場二ノ三

讀書展望三ノ九

三色旗八號

慶應通信教材

慶應通信教材

慶應通信教材

慶應通信教材

慶應通信教材

日本古書通信一四ノ三

露伴全集月報第一〇號

三色旗二八號

三色旗二九號

三色旗三〇號

三色旗三二號

昭和二十六年（七十八歳）

鼠の草紙

露伴全集月報第十六號

江戸時代の書目補遺（一）

三色旗三九號

江戸時代の書目補遺（二）

三色旗四〇號

三馬の机と日記

讀書人

樂翁公と中井竹山

青淵三一號

姉と妹と自分

千代田七號

昭和二十八年（八十歳）

樂翁公と中井竹山（續編）

青淵四七號

昭和二十七年（七十九歳）

欠本を揃へる話

日本古書通信一七ノ九

日本で印刷の古文獻

キリシタンの修養の提要

朝日新聞記事

丸善書店が百餘萬圓で入手

昭和二十七年十二月

御自慢ノート

毎日新聞記事  
昭和二十七年七月

上野圖書館

讀書春秋十二號

以上は幸田先生御自ら作製途上に在りし著作目録に河北辰生氏が加筆されたものを整理したものである。初期の翻譯マツケンデの十九世紀史や百科全書中の東洋史等々が脱落してゐる。猶ほ掲載雜誌の不明なものもあるが、今遽かに調査しかねるので、この點を發表することゝした。寛恕を請ふ（吉田小五郎）

ペリー日本紀行の最初の日本譯（幸田成友）

### 慶應二年刊行西洋事情初編四種

西洋事情初編は、慶應二年丙寅初冬の刊記あるもの、明治三年の再刻、明治六年の再々刻本の三種がある。福澤も全集緒言でいふ如く、眞偽版合して二十萬乃至二十五萬部の賣行を示したものである。この賣行に應ずるために眞版の版木も一種類だつたと考へられない。今日までに筆者の遇目した慶應二年版の眞版とおもはれるものにも左の四種がある。

- 一 大さ半紙版。表紙濃藍色紙表紙（網目地模様）。題箋西洋事情一とある（再々刻以降のものには初編の文字あり）。見返しと口繪用紙は白色洋紙。本文用紙は土佐紙。奥付に「福澤氏圖書記」、「尙古堂記」の朱印あるもの。
- 二 見返し用紙は黄色和紙、口繪用紙は厚雁皮紙を用ひてゐる點を除いては他は一に同じ、やゝ版木が一に比べてずれてゐる。
- 三 見返しに「慶應義塾藏版之印」の朱印があり、奥付に朱印がない外は二と同じもの。
- 四 大さ半紙版よりやゝ小、表紙は濃藍色紙（地模様なし）

題箋は不明、見返しは赤色和紙、本文用紙は薄葉、三冊合本、版木と奥付と朱印は同文であるが相違するもの。

（六五頁へ續く）